

下水道としても—— 4

〈色は匂へど散りぬるを〉

「下」ネタがもうすこし続きます。ご容赦のほどを。

先月号で、老人へのイニシエーション、老人入門を果たした、もう若くないという覚悟ができた、というハナシをしましたが、「下」にかんして、忘れられないエピソードがもう一つあります。

医院の改築が終わった頃、ですから、もう10年以上前、私が55才ころのおはなし。トイレを掃除していた方から、便器の外側、床との接点が拭いても拭いても汚れが取れない、滲み出てくるようだ、と報告あり。どれどれ、と実際に拭き取ってみると、黄色い汚れがあきらかに付着する。すこし匂う。てっきり内側の管から、洩れていると思った私は、改築した工務店のKさんにみてもらおう。いやー、内側から洩れ出ることはない、外側の汚れです……様子をみてください、とKさんは帰ってしまう。

外側からの、汚れ、つまり「尿が散る」ってこと？それが便器の下まで流れてこの汚れとなる？そんなことは絶対に考えられない。私はKさんに、私の目の前で、便器を外してみ、とややつよく注文をつける。数日後、Kさんと一緒に来た業者は、いとも簡単に便器を外した。はい、どうですか？

素人目に見ても、こういう構造なら外に滲み出る、ことはありえない。わかった、わかった。と引き下がる私。

だとすると、やっぱり、尿をまき散らして、その余滴が汚れの原因か、そうとしか考えられない。

この頃、決定的な事件が起こります。夜中のオシッコのはなしは、以前にもしました。それは就眠中ではなかったのですが、風呂に入り、パジャマに着替えて、寝酒をやっていたとき、尿意到来。ぼんやりして、別の考えごとをしながら、ふつうにオチンチンを出して、何気なく排尿する。普通に終わった、と思ったら……

なにこれ、ウッソー、私のパジャマのズボンが、ビシャビシャに濡れているのです。ウソだ、ウソだ、と思いながら、咄嗟に思い出したのは、こういう患者さんが以前にいたな～。しかも数人目撃している。高齢の男性、トイレから出てきて、そのまま診察室にはいつてくると、本人も知らない、気がつかない。私には目の前のおじいさんのズボンが濡れているのが判る。

ああ、自分もじいさんたちの仲間になったのだ。自分では前方に放尿しているつもりが、尿の勢いが若いときと違う。ちよろちよろした力のない流れは、しばしば手前のズボンに当たってしまう。

そうか、こういうことも起こるのか。Kさんは、わたしに、年輩になると、便器の外に、撒いてしまう排尿が多くなる、ことを教えてくれたのだ。私がつよく言ったものだから、直接には施主さんにそんなことは言えないから、わざわざ業者を連れてきて、見せてくれたのだ。アリヤー、Kさんには、もう頭だ上がらないな～。

医院のトイレを使うのは、ほとんどが若い男性なので、若さゆえの「散らし」もあるでしょう。それに今度は私のような「加齢の散らし」が加わった。文字変換の遊びをすれば「華麗なる散らし」です。・・・どこが～～？

このトイレの二つの事件を経験してから、私はオシッコにも細心の注意をはらうようになりました。どこか他所を見回しながら、鼻歌のひとつもうなりながら、放尿をするという、男の醍醐味は、もうナシ。特に外出先のトイレでは気を使います。我家では、やはり油断することがあって、うっかり他のことを考えているときに、ズボンを濡らしたことが数回在ります。

「色は匂へど、散りぬるを」は空海が作ったとされる「イロハ歌」です。匂いたつような若さは「誰そ常ならむ」と過ぎ去ってしまう、散ってしまう、と無常感を歌っています。

ちょうど、この頃は、母親のオシモの世話をしている、無常を感じながら、汚いなんて言ってる場合ではなかった十年間くらいと重なる。

医院でトイレにはいる度に、その汚れをトイペでさっときれいにする、なんてこともできるようになった年ごろでした。

——以下次号——

## タイチーセンス・57

～努力は積むこと自体に意味がある～

努力はするものではなく積むものである。

よく努力しているのに成果が出ないという人がいるが、そんな事は当たり前だ。努力したぶん常に成果が上がれば誰だって努力するだろう。だから、そういうのは努力とは言わない。

上手くいかないときに、その解決に向けて試行錯誤しながら出来るまで繰り返す事を努力というのだ。

単に一生懸命がんばるとか、成果が上がる前に止めてしまうのは、そもそも努力とは言えないのだ。

だから努力しているのに上手くいかないと言うのは当たり前である、と同時に、努力したけど上手くいかないと言う事は有りえないのである。努力とは困難を克服したという結果に伴った過程の事をいうのだから、努力とは常に過去形なのである。

天才ならともかく、多少才能に恵まれていたとしても普通に頑張っ得られる成果などたかがしれている。凡人であればなおさらだ。

しかし努力を繰り返し続けられれば、確実に成果を積重ねていける。多くの人が才能を羨んだり、不足を嘆いたりするが、努力の方が才能に頼るよりも、より確実に高く成果を積み上げられるはずだ。

才能を羨むのはもっと楽しんで成果を上げたいと言っているのと同じで、努力していない人に限って自分には才能がないから、と言うのである。

そういう人にとっての最大の敵は、才能ある人よりもむしろ、才能に恵まれていなくとも地道に努力を重ね成果をあげている人である。そういう人達に向かって言うお決まりの文句が、努力出来るというのも才能である、というものだ。

努力は、出来るか出来ないかではなく、するかしないかだ。努力は全ての人に平等に与えられた希望なのだ。

自分の才能や今有る実力では得られない成果をひとつずつ重ねて行く。成果が積み上げられていくことが努力の証なのだから、努力すること自体に意味があると言えるのだ。

「タイチーセンス＝太極拳的感性」と表題を変更しました。

—以下次号— 太極拳：奈良英治

